

研六九

佐伯城 絵図 解説

補遺 天理図書館「日本城図」

会頁 小野英治

江戸時代に於ては、秘中の秘とされた若くは考へられる城郭図が、一般に流布されてきたとは古よつと考へられないうちであるが、城の略図集といえるものが、意外と出まわっていたのであった。

その代表的なものに「主図合結亮」(一五二)があり、外にも「扶桑図記」「集図合結」「日本城図巻」「諸国城之図」「日本城図」などがあるが、その内容は、いづれも大同小異といえるものであり、大きさも美濃殿大で、近世の城を主とし、縮尺、方位などのない概畧図であり、版木として伝わらず、写本として流布されており、彩色されて、目録統一された描写であるといふのがその特徴で、もちろんで、作者、年代などの明記も当然ながら及ばない。

筆者の見聞するところでは、郷土佐伯城に關しては、「日本城図」(天理図書館蔵本)のみかようであるが、これは「都市図の歴史」(日本編 矢野一秀著)により筆者の知るところとなつたのであり、天理図書館に依頼してそのコピーを送っていたのだが、次に掲載の図である。

(お断り) 印刷の都合上そのコピーを約二分の一に縮小、精密に製版の上印刷したものである。製版、印刷は清田会員による。

さて、これらの城郭図集であるが、なぜこのように、

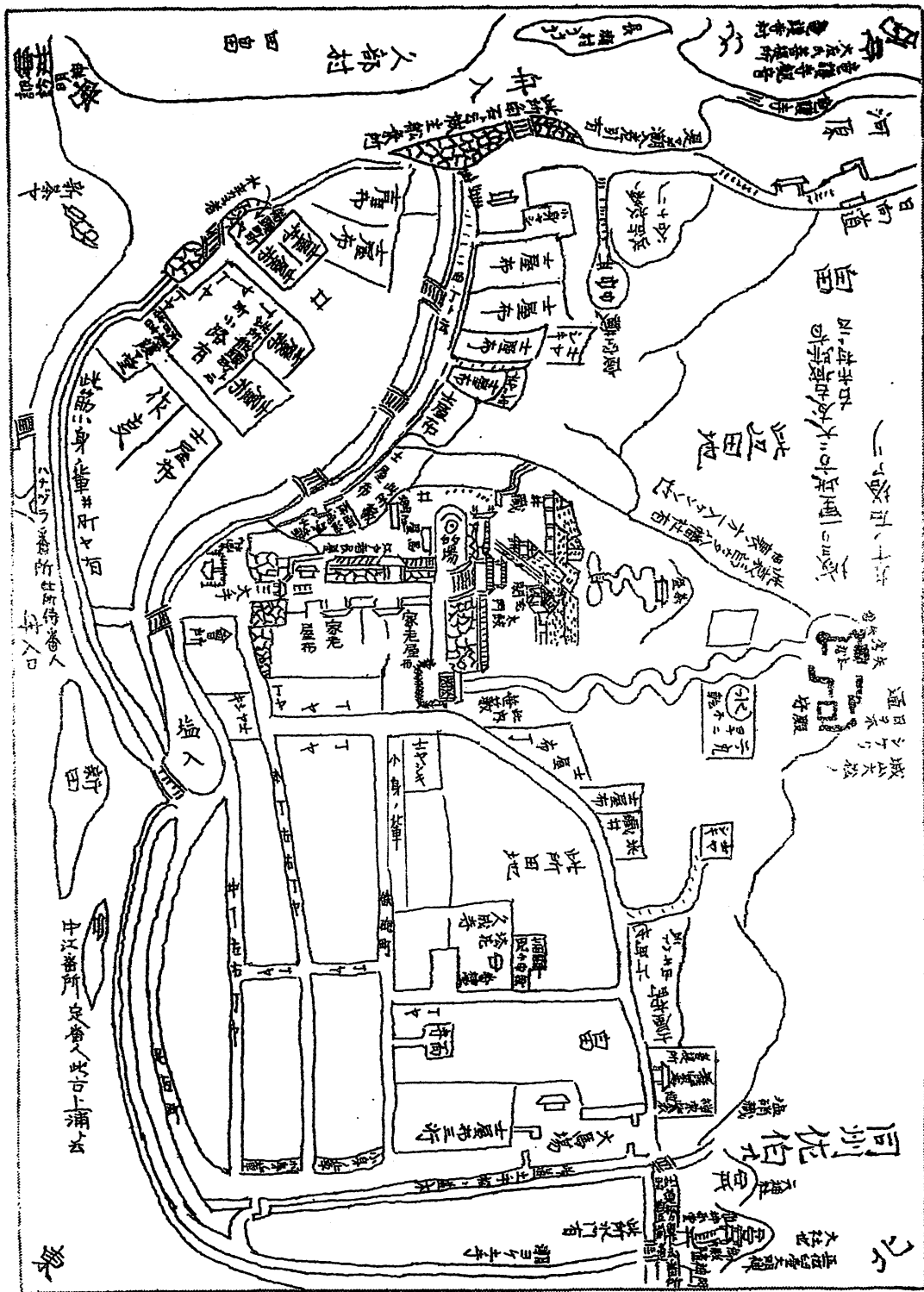
たとえ正確なものでないにしろ流布されたのであるか。それも軍事機密に属するものとして、公開されなかつた城郭に關する図が、江戸時代において次々と写しとられていたことは、注目すべきことである。

今まで伝へられていたところでは、隱密作製説、諸大名が幕府へ提出した城郭図が漏洩したとする説などがあるが、現在のところ不明である。

ただ江戸時代にあつて、この種の図が流布した理由の一つは、軍学の研究として用いられたため、武士間において筆写所載されたといえるようである。

もとより、正確か否か調査が困難な當時のこと、中には現状と著しく異なつた図も多数あり、反面意外と似ている図もある。これは天明三年(一八一三)古川古松軒の著書「西遊雜記」(注三)で、白井地方の紀行文の中に

世に主図合結という軍学の秘書有りて予此書を携へ其地々々に引合せ見しは、城内の事は知らざれども、廓外山なり。城のかたちにて、甚よくうつせし有り。所によりては方角の取違へも有りて、大いに違ひし有り。此白井城などは、外見齟齬多く、第一風景をうしなふ。予軍学の道は曾て知らざる事ながら、よくよく考へ思ふに、其城地の四方三里五里の湖の地理を知りて、東の方にはかくか如き切所(山脈など)有り、西の方何里には嶮岨(サキ)の坂有り。南には門あり、直道有り。北は曲道、門道、海手のかたは海の深淺、或は海底の岩石、または何れの風には船くりによく、何のかたの風にはおしといふ事を記しおきなは、まさかの時少しは益ともなるべきに、当世に云軍学は地理の事は論せず、城取の繩張、備立、又古戦場の地圖を以ていろ／＼の説をいふのみなり。(中略)主図合結の書強て信ずべからず。



と記して、大変きびしく批評しているが、反面、城と城下町を描くほど正確な図については、往時の城と城下町の総合的概察を知る上で有意義な資料とする見方が今日では出ている。

さて、前置、引用が大変長くなったが、以上参考にして、この佐伯城の図をみていただきたい。

お断りしておくが、この図は冊子になっていて、測係から、織代が中央に出来、一部コピーされた古い箇所が出来て、左右がうまく結ばれないのが残念である。しかしその大畧は理解出来る。なお原因は色彩があるものと考えられるが、この点も考慮して見ていただきたい。

本図は一見、いかにも隠密が作製した図のようには、要所(関門、水の手など)を記入した見取図的なものとなっている。

第一に気付くのは、山城部分の緩張が全く現状と喰違っており、書入の通りこれは城下より外見から想像して記したものではなからうかと考察される。それは水の手の方角も、このところにも二、九と記しているのも、事実と大いに異なっており、これは、現地を確認せず、書入れた事を物語っている。

次に、三の丸御殿は、葦葺のようには描かれているが、はたして、この図が調製された時は、葦葺でなかつたのであるうか。この箇所はいかにも現地にあつて記したような絵となっている。

ではこの図はいつ頃調製されたものであるうか。私はい次のようなことから、これは六代城主、毛利高慶の時代、それも、寛保二年(一七四二)当時のものと推測している。

「嫡子摂津守居住」の記入が大寺門の向つて左手に見えるが、歴代城主中で摂津守に任官しているのは、二代高成公と、六代高慶公の子高通しかない。しかし二代

の当時に日三の丸に居館がなく、かつ三の丸櫓門に太鼓門の記入があるが、太鼓を三ノ丸櫓門に設置したの日は、元禄十四年(一七〇〇)高慶公の時であり、どうも嫡子摂津守居住は、高慶公の嫡子で城主になる前に摂津守に任官していた高通に關係がありそうである。

もつとも高通は、父高慶公より先に死亡(享保十八年七月二十三日)して、城主にはならず、その弟、高能大夫同様死亡(元文五年正月廿四日)で、結局、七代城主には、高通の嫡子(長子)高丘がなっている。よつて摂津守(高通)の嫡子居住とすれば、いかになまものである。

次に、なぜこの記入があるのであるうか、私は、この時その必要があつた、つまり高慶公が病で隠居の時点にあつてはたからたと推測している。「鶴藩略史」(増村隆也談)寛保二年の項に、次の如く記している。

寛保二年 三月公尚日病。乃ち將軍の待至平賀玄純を江戸に迎え其の診察を(二十三日)受く。玄純遂に佐伯に来る。(四月十一日)歸去す。

四月十三日 公病を以て辭職を請ふ。將軍乃ち監察本田大淳(四千五百石)を使して莅視(共三)せしむ。

六月廿八日 本多大學佐伯城に入る。公に見へて將軍の放を伝ふ(朔日)歸去す。

久成寺の鬼子母神の記入は、鬼子母神の創造が享保十五年(一七三三)であり、身分格式による屋敷割の記入があるが、これは元文元年(一七三六)以後の事を意味しているから、これ以前ではありえない。

以上からして、私は堂々と城主の居館に出入出来、かつ城下町その他要所を見聞出来る立場にあつた者、すな

わち本多大塚当人か、彼に随行した人物により、寛保二年頃調製されたのがこの図面ではないかと考察している。それが、どのような経過で天理圖書館蔵となったか不明であるけれども、ともかく、佐伯側から調製された図とは考えられないから、たとえ具取圖的なものであっても、特異な図面として、当時の佐伯城と城下町等を知る上で貴重な資料である。

(注一) 主図合結記 城郭図彙編の集成、(厚本として全国的に類本、異本が多い。従来山県大氣が明和年間城取の軍学を講じて右に記した城郭図彙編を収集し、死後弟子たちによつて編纂されたと伝えられていたが、今日では、彼が生前よりこの書が存在するところから、この説は否定され、現在のところ著作者は不明である。

昭和四十三年「日本城郭史料集(人物往來社)収録
昭和四十九年「城郭圖譜、主圖合結記(矢野一考編)」(名著出版社刊)がある。

(注二) 西遊雜記 幕府の内命を受け左隠密ではなかつたかと考えられていた古川古松軒が、天明三年西國を旅行した時の紀行文で、城郭や土地の形勢と、要点をつかんで書いている。とくに最下級の地方住民の生活描写が注目されている。

(注三) 廿二日 其の場に行つて視ること(大義和辞典)

(以上)

偶感

老 樹 礼 賛

会員 羽 柴 弘

老人福祉のことがかなり行き届いて、このところお車の寄の生活はかなり明るくなった。よいことである。

樹木の世界でも、名木・大樹が大切にされるようになって、昔からの天然記念物指定は言わずもがな、昨年奈良

市町村が、その調査や保護に努めている。これも結構なことである。僅かに残っている社寺の境内などの老樹を調べてまわり、指定保護しようとするものだが、このことは、とかく野放しになりがちで、地域間差に植づいてはいる格好である。

しかし奥南地方には、これといつて特筆に価する樹木が少なく、肩身のせまい思いがする。僅かに二三の神社の森を思い出せるに過ぎない。国有林は青山の奥などにあるが、原生林と呼ぶには行程とおく、いさゝかさみしい思いがする。

初秋九月四日、私は姪女と共に東北の英彦山に登り、翌五日は守
佐八幡の真室神社山に登る機会を得た。

ある所に及ぶるものがある。樹令三四百年と思われ大杉が何千本と文字とあり林立し、秋の陽に高く聳えたる幹を光らせている。信仰の山とは、よくもこんな大木に大事にされていることに驚嘆した。春霧殿の前庭の老母は節くれた大きな枝を張り、樹高四十メートル、根まわり十二メートル、八百年と書かれておいた。

御許山口側の御許山騷動で勤皇軍のたてこもった山、宇佐神社宮元宮の社殿がある。境内家道の杉の老樹、その大きさは若者山に劣らない。歴史のしんがりに、社叢の雰囲気は、ちひな私の文章でいかにもならない。粟登山道に沿う原生林に心をなつかせた。国有林である。

宇佐神社の境内、神灰の社叢も、私の眼底から消えない。フツと林原八幡の大樟や、回東の櫻八幡の社叢を思い浮かべる。九月十日に訪れた戸次の楠木生(くすきう)の大樟も大きい。地をさするこの大樟があったことよつて生まれてくる。

これら特別なものに比べると、佐伯地方には、これといったおぼろしいものかきわめてすくない。

佐伯・南郡一帯は造林がすすみ、廣葉樹林が少なくなつて、杉の造林が谷はたから山の根までつづいている。それはよいとして、神社の森をはじめ、村里のあちこちに残っている由緒ある老樹・巨木をこの際見なおして、いつまでも保存愛護したい。それその老樹何百年の歴史を、敬虔な気持ちで尊重したいと思う。(おわり)